

成蹊大学図書館蔵貴重書 解説目録

(3) ギリシア古典関連の17世紀刊本

細井敦子・平田眞・成蹊大学図書館
特別寄稿：片山英男

Rare Books Section of the Seikei University Library
Annotated Catalogue 3: Greek books printed in the seventeenth century

HOSOI Atsuko ・ HIRATA Makoto ・ Seikei University Library
KATAYAMA Hideo

簡略目次

はじめに39
11. Nicolai Rigaltii Glossarivm Tacticon mixobarbaron (ニコラ・リゴー編著『軍事戦術用語集』) Paris, 160140
12. Callimachi Hymni cum Notiis Annae Fabri (アンヌ・ルフエーヴル監修『カリマコス作品集』) Paris, 167555
参考文献(追補)58

はじめに

この目録は、本学図書館貴重書室に収蔵されているギリシア・ラテン古典関連の刊本について、その概略を、学生をはじめとする学内外の興味をもつ人々に紹介する目的で作成されている。これまでに「解説目録」として(1)「西洋古典の初期刊本」(『文学部紀要』41号2006年)、(2)「Thorne文庫の16世紀刊本から」(同42号2007年)およびその「補遺」(同43号2008年)を公刊した。No.1: 1498年刊のアルド版『アリストファネス喜劇作品集』からNo.10: 1584年のトマス・ウィルソン著『弁論術』に至る。今回はそのつづきとして、17世紀の刊本2点をとりあげた。17世紀初頭刊行のNo.11の編著者の生没年は1577-1654年、No.12の校訂監修者のそれは1654-1720年で、二書ともに二人の最初期の著作である。作成にあたって、ヘレニズム時代の詩人カリマコスの校訂版(No.12)について、本学蔵本と同一刊記の版本を所蔵しておられる東京大学大学院の片山英男教授にその解説をお願いすることができたのは、大きな喜びである。関連情報や資料の面では、Ecole Normale Supérieure (rue d'Ulm, Paris)図書館の畏友 Pierre Petitmengin をはじめ、学内外から、

M. Marcel Chantry (Saint-Maur)、前摂南大学教授の埴陽子氏、早稲田大学の雪嶋宏一准教授、東京大学西洋古典学研究室の小池登助教、本学法学部の横山裕人准教授および国際基督教大学図書館、早稲田大学中央図書館の貴重な助力をいただいた。厚くお礼申し上げます。

11. ニコラ・リゴー 編著 『軍事戦術用語集』

標題と刊記： NICOLAI |RIGALTII | GLOSSARIVM | Τακτικὸν μιξοβάρβαρον. | DE VERBORVM | SIGNIFICATIONE, QVÆ | AD NOVELLAS IMPP. QVI | in Oriente post Iustinianum regna-uerunt, de re militari Consti-|tutiones pertinent. [Device:] LVTETIÆ, |Apud AMBROSIVM DROVART, via | Iacobæa, sub scuto solari. | M.DCI. | CVM PRIVILEGIO REGIS.

ニコラ・リゴー [編著] 『軍事戦術ギリシア語用語集。ユスティニアヌス帝後の東方帝国諸帝の軍事関係新勅令における用語の意味について』¹。

パリ、アムプロワーズ・ドゥルアール書肆刊、1601年、国王の出版特認取得。

成蹊大学図書館 請求記号：B10/118/Thorne 資料ID: 88252682。

(成蹊大学図書館作成 『サミュエル・E・ソーン文庫²目録』1990年 p.11：標題と刊記、220p.; 22cm.)。

体裁： In-4 ° 124紙葉：8 fol.+220p.+6 fol. 209 × 143mm. テキスト面 170(152) × 102mm.

折丁構成： ã⁴ ã⁴ A-Z⁴ Aa-Ff⁴。本文21行/頁。アルファベットごとに頁を改めて装飾を施す。項目となる見出し語は、すべてそのつど中央に配置し、頭文字には飾り字を用いる。余白を十分にとり、手写本の面影を多分に残した、合字や縮約形をもつ大きめの活字を使用するなど、全体として美しい作りとなっている³。

捕語：各折丁末尾に捕語あり。

装訂：再装訂の茶色モロッコ革、畝のない背表紙、背に“RIGAVLT/GLOSSARIVM/M.DCI”。天地および小口は黄色に彩色されている。後見返し紙裏に、古書店による書込み“Later full morocco, rubbed but sound, some worming and the title page dusty, but a good copy.”あり。

来歴：表紙裏に赤地に金文字のソーンの蔵書票“Ex Libris S.E. THORNE”の貼付あり。見返し紙表おもてには鉛筆書きで“S E Thorne 1936”とあってソーンが本書を入手した年と推定される。標題紙表に

¹ μιξοβάρβαρον については後述 p.47 註 38。この語は *LSJ*: “half barbarian half Greek”。Sophocles および *LSJ/Suppl.* には収載されていない。また「ビザンツ(帝国・皇帝・時代)」という名称は、Hieronymus Wolf が 1557 年に *integrum Byzantinae historiae corpus* なる企画の端緒として Zonaras, Nic. Choniates, Niceph. Gregoras の初版を公刊して“the founder of modern Byzantine studies”となった (Pfeiffer *HCS* II, 140) ところに由来するが、N.R. 自身は未だこの名称は使っていない。

² Samuel Edmund Thorne (1907-1994)：Harvard Law School 名誉教授、英国法制史の権威。その蔵書約 2800 冊が、本学法学部の田中英夫教授(故人)によって 1988 年本学図書館に収蔵された。

³ Considine 253 はこれを It was in a French tradition of graciously typeset little classical books と評価する。F.G.Freytag (*Analecta Litteraria de Libris Rarioribus* 782 sq.)によれば 18 世紀中頃には本書は「発見が容易でない本」(Librum inuentu haud facilem) のひとつであった。ちなみに、パリの Bibliothèque nationale de France (略称 BnF) 所蔵の同刊記本は、2001 年 11 月～2002 年 2 月に同図書館で開催された「貴重書部門蔵本展」に展示されている。

“IW”、裏に“ex Libris Iacobi Watson junioris.”なる、いづれも褪色した黒インクの書込みがありソーン以前の旧蔵者と考えられるが、この人物については未詳である。

内容概略：

ff. ã1r : 標題頁 (上記標題と刊記) . f. ã1v : [ブランク] .

ff. ã2r - ã4r : 著者 Nic. Rigaltivs より Achilles Harlaeus Eques, Regni Curiae 宛⁴の献辞、パリ 1601 年 2 月 26 日 (Lutetiae Parisiorum. IV. Kalend. Martias. A. S. M.DCI.) 付 .

ff.ã4v - ã1v: Lectori. 著者より読者への序文.

ff. ã2r - ã4v: Glossarii Synopsis . 目次 ('ΑδέσπρατοからΨευδοπάτιονまで項目 256 語) .

pp.1 - 212 (=ff. A1r - Dd2v) : 標題と本文 .

pp.213 - 218 (=ff. Dd3r - Ee1v) : Varie lectiones, et ommissa quaedam. 異読と補遺. 末尾に年記 (Scribebam Lutetiae Parisiorum. A.S. M.D.XCIX. Rebus prolatis.) および正誤表 .

pp.219 - 220 (=f. Ee2r-v) : 索引 [1] : 本文中に出る未校訂著作者 [写本] 出典 15 点の一覧 . 本文中の該当頁表示せず .

pp.220 -[223] (=ff. Ee2v-Ee4r) : 索引 [2] : 刊本からの出典 70 数点一覧 . 本文中の該当頁を表示 .

ff.Ee4r - Ff3r (= [pp.224-229]) : 索引 [3] : 重要事項索引 . 本文中の該当頁を表示 .

f. Ff3v (= [p.230]) : 国王による 10 年間の出版特認抄 (1601 年 3 月 10 日付) および N.R. と Ambroise Drouart⁵ ・ Claude Morel⁶ 両書肆との出版契約 (同上日付) . f. Ff4r-v: [ブランク] .

解説：Nicolaus Rigaltius (Nicolas Rigault ニコラ・リゴー 1577-1654) はパリに生まれた . ほぼ 1 世紀前の古典学者ギヨーム・ビュデ (Guillaume Budé 1468-1540) をはじめとして、ルネッサンスと宗教戦争、「三十年戦争」、王権の伸張という激動の時代を生きたユマニストたちの多くがそうであったようにニコラ・リゴー (以下 N.R. と略記) も司法官として国務の要職に携わりながら、ギリシア・ラテンの、古典期よりののちの時代の作品 (post-classical Greek and Latin) に関する業績を残した humaniste de robe であった . 本稿筆者にとって「リゴー」の名は、本学図書館のソーン文庫において本書に接するまで未知であったので、以下にかれの生涯と仕事について今回調べたことの概略を、1)略伝、2)王室図書館の目録作成、3)著作、の順で報告しておきたい⁷ . 調査対象である標

⁴ Achille 1^{er} de Harlay (1536-1616) : 1582 年からパリ最高法院院長を務めた . J.-A. de Thou の義兄に当る .

⁵ Ambroise Drouart (1548-1608) : 名は Amboise とも表記される . Drouart 家は代々の出版者・書籍商で、名高い Estienne (Stephanus) 家の姻戚にあたる .

⁶ Claude Morel は 1608 年「王室印刷者 (imprimeur du roi)」となる . 父 Fédéric/Frédéric は interprète du roi (王室翻訳者) をつとめた学者でもあった . Morel 家も、Estienne, Josse Bade, Vascosan の三家と姻戚関係でつながる、ユマニスト印刷出版業者の名門家系の一つ .

⁷ 基本的な古典学史文献では、Sandys (II 238) が、反宗教改革時代のフランスの古典学者たちが、関心の対象を次第に教父研究などキリスト教関係の分野に向けていったことを述べる中で、リゴーの Tertullianus および Cyprianus 校訂注釈に短く言及している . Pfeiffer *HCS* II, Wilamowitz/Lloyd-Jones *HCS* には Rigault の名は見えない . なお本稿における「校訂」(editus) は厳密な意味での Textkritik ではなく、「手写本にある本文を、刊本のための本文にする」作業を指している . cf. McKitterick 13.

記の書物の内容は、3-2) で記述する。

1) 略伝

N.R.は医師の子として1577年パリに生まれ、イエズス会の教育機関で初期の教育を受けたのち、ポワチエ大学(1431年創立)で法律を学んだ。フランス中西部の都市ポワチエはFrançois Rabelais, Joachin du Bellay, Pierre de Ronsardらフランス・ルネッサンスのユマニストゆかりの地であり、代々学者文人を出したSainte-Marthe一族もこの地の名家であった。N.R.はScévole de Sainte-Marthe(1571-1650)のサークルに属してラテン語の詩作に励んだという。とくに1596年に作った諷刺詩*Funus Parasiticum*『食客の埋葬』⁸は、Sainte-Marthe家と親交があるパリ最高法院⁹の部長(le président à mortier au Parlement de Paris)の一人でJ. J. Scaligerの友であり、歴史家・大蔵書家としても知られたJacques-Auguste de Thou(1553-1617)の注目をひき、N.R.はde Thouに認められてその庇護を受け、長く親交を結ぶことになる。のちにはP. Depuyと共に、晩年のde Thouから子弟の教育を任され、未完で残された*Historiae sui temporis*の続きを書く仕事¹⁰も委ねられるのである。

一方de Thouは、国王アンリ4世(在位1589-1610)の治世下で、プルタルコス『英雄列伝』のフランス語訳者としても知られるJacques Amyot(1513-1593)の死去以来数年のあいだ空席となっていた王室図書館長(maître de la Librairie / la Bibliothèque du Roy)に任ぜられ、かれのもとではIsaac Casaubon(1559-1614)が1604年から正式の管理者(Garde de la Bibliothèque du Roy)として図書館運営に当たっていた。そして、新教徒であったCasaubonが英国へ亡命して1614年にそこで没すると、管理者の職務が、すでに代行として仕事に精通していたN.R.に委ねられ、さらに1617年de Thouの死によって館長の地位がその幼い息子Françoisに相続されたため、じっさいにはN.R.がすべての重責を担うことになったのである。王室図書館は、国王ルイ13世の時代(在位1610-1643)にはrue de la Harpeにあるフランシスコ会の建物の中に置かれていたが、そこでのN.R.の最も重要な業績は、それまで非常に不完全な形でしか存在しなかった蔵書目録をあらたに作成しなおしたことである(これについては次項に記述する)。またルイ13世の時代1622年にギリシア語写本やインクナブラを含む約400点から成るHurault家の蔵書が王室に入った時には、N.R.はPierre Dupuyらと共に蔵書の価格査定にもあたった。

⁸ 正式の標題は*Funus parasiticum, sive L. Biberii Curculionis Parasiti Mortualia. Ad ritum prisci funeris*.この作品は1601年にパリでA. Drouart, Cl. Morel両書肆から刊行された。ライデン他各地で諷刺詩集に再録され、のちに、内容の類似性から、パリ大学のギリシア語教授Pierre de Montmaur(1576-1648)を諷刺の対象として攻撃する書物の中にも入れられて版を重ねた(H. de Sallengre xlj -)。

⁹ 境による訳語。「高等法院」とも訳される。

¹⁰ これにはSainte-Marthe兄弟も加わり、初版(ラテン語)は1620年バーゼルで刊行された。成蹊大学図書館ゾーン文庫には、この書のフランス語版*Histoire universelle de Jacques-Auguste De Thou, depuis 1543 jusqu'en 1607*, Paris 1734, 16 vol. がある。その第15巻(*Suite de l'Histoire de Jacques-Auguste de Thou. Par Nicolas Rigault*)には、De Thouと、J.J. Scaliger, J. Lipsius, I. Casaubonほかの学者たちとの往復書簡多数や、De ThouがN.R.らに子弟の教育や仕事の完成を託した遺言等もおさめられている(請求記号: 944/1*Th8/15)。

N.R.は、王室図書館の職には、1645年2月に Jacques & Pierre Dupuy 兄弟が引継ぐまで留まったが、1633年、新設されたメッス（メッツ）最高法院の評定官（Conseiller au Parlement de Metz）に任じられ、ついでナンシー最高裁判所代訴官長（Procureur Général de la Chambre Souveraine de Nancy）1637年にはメッス州司法警察総代監（Intendant de la Justice et de la Police de la province de Metz）として神聖ローマ帝国との国境地方を統括する地位にあり、Metz 最高法院が置かれた任地のトゥル（Toul en Lorraine）で没した¹¹。

宗教改革と反宗教改革の嵐の時代に生きて、N.R.は終生カトリックの側にとどまったが、それはローマ教皇の直接支配からは自由であろうとするガリカニズムの立場であり、パリ最高法院によって禁書とされた或るパンフレットを擁護する論評を公にしたり（*Dissertatio Censoria*, 1640）教義の解釈についてしばしば逆説的な論を立て、新教徒（カルヴィニスト）側に有利な見解を提供することになったといわれる。例えば Tertullianus 解釈の中で、必要な場合には在俗者にも聖体奉獻が許されるとする解釈、すでに Tertullianus の時代に、イエス・キリストはその相貌体格の点で一般に信じられているような美しさをもっていたわけではなく「罪」以外のあらゆる点において人間の弱点を有していたことが論じられていた、とする見解などである。ことに聖体論争は、N.R.の論を擁護する側に Hugo Grotius や Claude Saumaise、反論する側に P.Petau や H. Dodwell ら各国の学者をまきこむ論争となって N.R.の没後まで続けられた¹²。

2) 王室図書館の目録作成

王室図書館は、アンリ4世の治世（在位1594-1610）に館長 de Thou のもとで、ギリシア語写本多数を含む800点近い古写本をもつ Catherine de Médicis（Henri 2世妃）のメディチ文庫や Saint-Denis 大修道院の文庫などを取得して、蔵書数は顕著に増加していた。N.R.の目録は、I. 蔵書の中核をなすもの即ちヘブライ・ギリシア・アラビア・古代ラテンの諸語による写本、II. 後代ラテン語写本、III. フランス・イタリア・スペイン語写本、IV. 印刷本（ヘブライ・ギリシア・ラテン語）、V. 印刷本（フランス・イタリア語）の5部から成り、各部はさらに各語別に分けられて、合計4712点¹³を記録している。作成には N.R. が中心となり、Claude Saumaise (Salmasius) と Jean-Baptiste Hautin がかれを補佐して、手書きのカタログが1622年に完成した。Delisle¹⁴によれば、I については2部が現存し、そのうちの1部は N.R. の自筆で、ルイ13世の紋章入りで装訂されて現存し（ms.lat.10364）、II から V については1部（ms.lat.10365）がフランス国立図書館に現存している。この1622年のカタログは、手写本と印刷本という二つのメディアを明確に分けて記述した点で画

¹¹ 没年については諸説ある：cf. “vers le 22 février 1653” (de Smet 727); “en Août 1654” 他 (Nicéron 57sq.)。N.R.の職歴の任官順については、Perrault の記述との違いはあるが、最新の de Smet 論文に従う。

¹² Perrault 139, Nicéron 64 sqq., BU108 ほか。

¹³ de Smet 729. なお第1部の写本には、Delisle（下記註14）によれば、1～2069の番号が付されていた。

¹⁴ Delisle 199sq.

期的なものであったとされる¹⁵。これ以前の、16世紀に王室図書館がフォンテーヌブロー城館にあった時期のカタログ（Onlineで見られる）では、書物の内容面での分野と配架場所による分類はなされているが、写本と印刷本とは混在していたのである。オックスフォードの Bodleian Library やライデン大学図書館のカタログで写本と印刷本の区別が明確になるのはパリに少し遅れて1620年代の末以降で、マインツにおいてグーテンベルクによる最初の印刷本が出現して（1448年）からほぼ2世紀を経た後であった¹⁶。

3) 著作

N.R.は詩作品や弁論、伝記、法律、歴史の分野における著作も多いが、ギリシア・ラテンでは紀元1世紀以後の作品の校訂や注釈を数多く公刊している¹⁷。主なものを略題で挙げると：Phaedrus, *Fabularum Aesoparum libri V*, 1599；Onosander, *Onosandri Strategicus*, 1599；Martialis, *M. Valerii Martialis Epigrammatum libri XIV*, 1601；Artemidorus, *Artemidori Daldiani & Achmetis Sereimi F. Oneirocritica*, 1603；Juvenalis, *D. Iunii Juvenalis Satyrae*, 1616；Tertullianus, *Q.S.F. Tertulliani libri ix. (Observationes)*, 1628；Cyprianus, *S. Cypriani opera* 1649等で、大多数の著作がN.R.の没後にも18世紀後半に至るまで版を重ねている。N.R.の仕事がこのように広い領域にわたっている背景には、かれが若年の頃から大蔵書家たちの厚遇を受け、学者たちと交わり、王室の蔵書を参観することもできる立場にあったことが考えられる。本稿では、今回の調査対象である『軍事戦術ギリシア語用語集』（*Glossarium Τακτικὸν μιξοβάρβαρον* 以下『用語集』と略記）を、これに先立って公刊されたOnosander『戦術書』校訂版¹⁸と合わせて記述しておく。その他の著作についてはde Smet論文の分野別リストで見ることができる。

3-1) Onosander¹⁹ 校訂と注釈

Ὀνοσάνδρου Στρατηγικός. Onosandri Strategicus Sive De Imperatoris Institutione. Accesit Οὐρβικίου Ἐπιτήδευμα, Paris 1599. Onosander Platonicus「プラトン学徒オノサンドロス」²⁰とよばれ

¹⁵ McKitterick 12. N.R.の目録のちにH. Omont, *Anciens inventaires et catalogues de la Bibliothèque nationale*, 5vol., Paris E.Leroux 1908-1909の中に印行された：t. II.IV (Premier catalogue de la Bibliothèque du roi, par Nicolas Rigault, 1622), V (Second catalogue de la Bibliothèque du roi, par Nicolas Rigault, 1622) および t. III. VII (*Catalogus Bibliothecae regiae, opera et industria Nic. Rigaltii, Claudi Salmasii et J. Hautini*, 1622)である。cf. McKitterick 235, no.35。

¹⁶ McKitterick 13. なお同書で著者は、情報の伝達メディアが印刷からデジタル化へと進む現代も15~16世紀当時と同様の困惑に直面していることについて論じている。

¹⁷ de Smet 730 sqq. に著作リストがある。NicéronがN.R.の伝記に付した著作目録は誤りが多く不十分である[20数点しか記載されていない]という指摘(BU)もあるが、時にNicéron自身のコメントが記されているので、当時の評価の一端を知ることができるものとして利用価値がある。

¹⁸ 書誌はBibliothèque nationale de France (BnF)所蔵本に基づく。インターネットの情報によれば、復刻版 *Onosandri Strategicus - De Imperatoris institutione*, Fexis Institute Athens 1976が存在する。

¹⁹ 現行のラテン名表記はOnasanderである(e.g. *LSJ Suppl.*)が、本稿ではN.R.に従って表記する。

²⁰ Suda (*Suida Lexicon* s.v. Ὀνοσάνδρος)に《φιλόσοφος Πλατωνικός. Τακτικά, Περί στρατηγημάτων, Ὑπομήματα εἰς τὰς Πλάτωνος Πολιτείας.》なる記述がある。

る著者の、おそらく紀元1世紀頃に書かれた戦術書／軍事教本²¹。ギリシア・ラテン対訳。頁を左右2欄に分けて、見開き両頁の「のど」側にギリシア語原文、小口側にN.R.によるラテン語訳が印刷されている。本文(pp.1-118)に続いて、紀元500年頃の戦術書の作者 Οὐρβίκιος／'Ορβίκιος による *Vrbicii Inventum* 「ウルピキオス／オルピキオスの新考案²²」なる論考のギ・ラ対訳が前半と同様の形で置かれている(- p.130)。標題に続けて“Nicolaus Rigaltius P. Nunc primum Graece et Latine in lucem dedit.” 即ちこれが初版本であると記されている。本文のあとに、校合に使った3点の写本を“V.M. (Veteras Membranae, vel Vetusta Macrocola), C.M. (Codex Medicus, ex Bibliothecâ Regiae Catharinae), L.M. (Liber Recentior)”の記号で表した「異読一覧」が置かれ、正誤表、索引等が30頁。このあとにN.R.による Onosander への注釈があり、その中には「古い皮紙写本にある破城槌(aries)の図を縮小した」図版6点が含まれる。BnF 貴重書部門所蔵本では、この注釈および Index (刊記1598年12月)部分(pp.1-96)は本体部分(162p)と合冊されている。

N.R.は序文において「私は博学なる人々の恩恵によって、メディチ文庫から2点の写本を手にした：一つは古い皮紙本で、二つ目はそれよりも後代のものである。その後また3点目として後代の写本も手にした」と述べていた。この3点の「オノサンドロス写本」はそれぞれ「異読一覧」に記載されたV.M., C.M., L.M.に当たる。そしてN.R.の記述と、現行のフランス国立図書館のOmontの目録にある写本内容(含まれる作者作品、図版の有無、手写年代など)と旧蔵番号を手がかりに推測すると、V.M.(図版6点を含む古いメディチ皮紙本)が Paris.gr.2442(11世紀手写、図版入り、Medic.-Reg.2174.中型本)であることはほぼ確実であり、C.M.(メディチ紙本)は gr.2445(16世紀手写、Med.-Reg.2173)、L.M.(liber recentior)は gr.2522(15世紀手写、Colbert.4090)ではないかと考えられる²³。

ともあれN.R.が、オノサンドロス校訂のために諸写本²⁴を比較検討するなかで、メディチ皮紙本を信頼できるものと評価しつつ、諸写本間の読みの異同を単語の形・表記と意味との両面で比較して、正しい読みをできるかぎり明確にしておきたい、という意志をもちつづけていたことは序文からも十分に読みとることができる。そのひとつの実現が、本稿でとりあげる『用語集』の作成だったと考えられるのであって、それは、ほぼ同じ時期にライデンの Bonaventura de Smet²⁵が、自分の

²¹ Cockle xxxv, 12 sq. No.14の解説によれば、作者 Onosander は、たんに先行書を模しただけの夢想家と非難される一方、「軍事を倫理的な、さらには哲学的な観点から扱った」という高い評価も受けた。將軍の選任、軍議、軍の士気の鼓舞、演習(模擬戦)、陣形等々についての考察を内容としている。なお A.Dain; *Les manuscrits d'Onésandros*, Paris 1930 は本稿筆者未見。

²² Cockle.xxxvii sq.によれば、この「新考案」は《chevaux de frise》(「敵の騎兵隊を防ぐ」防柵)を指す(cf. Krmbacher II, 635)。この新技術の出現は中世以来の騎士による戦闘の方法を近代的なものに変えさせた要因の一つであったといわれる。

²³ ビザンツ時代には、10世紀末から11世紀はじめにかけて皇帝たちのもとでギリシア古代からの軍事関係書の収集がなされ、そのなかで攻城術、戦術、海戦術、作戦術の四つのコルプス(写本集成)ができあがったと考えられている：Devreesse 1954, chap. xix, 273 sqq.に詳しい。

²⁴ 序文にはまた、印刷完了後にあらたに数葉のオノサンドロスの *Strategicus* 写本を Fed.Morel (上掲註6)から提供され、それも「4点目」として精査したことが述べられている。

²⁵ ラテン名 Bonaventura Vulcanius (1538-1614)。Henri Estienneのもとで校正係を務め、のちライデン大学ギリシア語教授。H.Grotius, D. Heinsius, J.G.Vossiusらもかれの弟子であった。研究の対象は Arrianus, Callimachos など後期ギリシア語作品の校訂から、ゲルマン諸言語の比較研究に及んだ(Considine 251 sqq.)。

Thesaurus utriusque linguae (Leiden, 1600) の前文に記しているところからも裏付けられよう。De Smet は「私の本の末尾には Zonaras [12 世紀]から後代[ビザンツ期]の史家たちを理解する手引きとなるべき “Glossae aliquot ελληνικοβαρβαροι”²⁶: something of a glossary of barbarous Greek”を入れるところであった、もし高名なる N.R.からの書簡で彼自身がその仕事にかかっていることを知らされていなかったらば」と述べている²⁷からである。

3-2) *Glossarium Tacticon mixobarbaron* 『軍事戦術用語集』の編著

『軍事戦術用語集』の献辞および序文

本書巻頭のパリ最高法院の院長である A. de Harlay にあてた献辞の中で N.R.は、この書には、「かつて東方帝国が造りだした、そしてこれまでは知られずにいたり蔑視されたりしていた、少なからぬ数の語が採録してある」こと、それらの語は、東方帝国の皇帝たちによる軍事関係の勅令 (in *Tacticis Constitutionibus Imperatorum* / in *rebus bellicis Constitutiones*) を始めとする、かの時代 [ビザンツ時代] の著作家「数も少なからず軽視すべきでもない人々」を理解するのに有益かつ必要であることを述べる。オノサンドロスの校訂を通じて得た、同じくギリシア語の形をとっていても古典語とは異なる語があるとの認識が “*voces quas olim Imperium Orientale proculdit*” 「かつて東方帝国が鍛造した語」なる表現となったのであろう。またこのような語が当時の受けとり方としては、知られていないか、(古典語のくずれたものとして) 蔑視されていたことも強調されている²⁸。

『用語集』の読者あての序文では、本書作成の過程が語られる。N.R.は、まづ「オノサンドロスの校訂版において約束したこと」をここで果たせるのは、F[rançois] Pithou (1543-1621)²⁹ が助言と最良の諸本によって (*qua libris optimis*) 力を与えてくれたことによるとして、かれの貢献の大きさに感謝している。N.R.は、本書に採録された語彙はビザンツの皇帝たちが軍事戦術書すなわち軍事関係の勅令の中で頻繁に用いたものであり (*permulta vocabula graecobarbara, quibus Imperatores aliquot, in suis Tacticis, hoc est, de re militari Constitutionibus, frequenter utuntur*) それらを写本から拾い出して比較検討すれば、有用な理解に達することが可能となる、それを今回、本書で実現したと述べている。そしてさらに、収録する用語としては「かの時代の軍事史に最も関係の深いと判断したものを拾うが、中でもレオン帝³⁰とマウリキオス帝³¹の著作は特別な重要性をもち、「かれらの

²⁶ 下記註 38.

²⁷ *Considine* 252, n.8 の引用による。

²⁸ Baillet (1688 年 *Des enfans* 251) がこの書の略題名を '*Glossaire Mixobarbare, ou de Grec corrompu*' 「改ざんされたギリシア語の用語集」と訳しているのも、一般的にはまだ軽蔑の風潮があったことを示している。

²⁹ 大蔵書家・司法官・学者として知られる一族の出。フランクの一支族の法にある語彙 (*post-classical Latin*) を校訂編集した *Liber legis Salicae* (Fr. Lindenbrog と共著, Paris 1602) がある (*Considine* 257)。

³⁰ ビザンツの軍事関係著作の中で重要なものの一つ *Tacticae Constitutiones* の作者は、Leo VI Sapiens (在位 866-912) 「賢帝レオン 6 世」とされる。ただし Krumbacher (II, 636) は Kaiser Leon [III] der Isaurier (在位 717-741) を指すとしていた。

³¹ Mauricius 帝 (在位 582-602) に帰せられる *Strategikon* 12 巻は、騎馬による陣形や攻城等々実戦上の戦術 (*tactica*) と、攻撃と防衛の判断など指揮官に要求される高次の戦術 (*strategica*) との両方を含み、上記 Leo の著作の基となったとされる重要な作で、後世への影響も大きかった (Cockle xxxviii, Mazal 178, Heuser 4-5)。Maurice, *Strategikon XI*, ed.G.T.Dennis & E.Gamillscheg, Wien 1981 があるが本稿筆者未見。

用語は、大部分が同じかほんのわずか異なっているからである。それでも一方が他方に光をもたらすような場合には、そのつど両方を併記して比較対照するのは骨折り甲斐のあることである」と N.R.は考えた。

典拠となる写本については、「レオン帝については2点を入手した³²：1点は王室図書館の、他方はメディチ文庫のものである。私は常により良い方の読みに従ったが、異読もつねに記し、本の末尾に異読を付した」とある。また、「コンスタンティノス帝の戦術書の写本は、パラティナ文庫から Ianus Gruterus が私に写しを送ってくれた³³ (exemplar e Bibliotheca Palatina descriptum misit mihi... Ianus Gruterus)。この写本はどこでもほとんど常にマウリキオス [帝の戦術書]³⁴の事柄と用語とに同類である。しかし両者が一致せずしかも私の目的にとって役立つとみえたものは、そのつどそれぞれの場所で注記した」としている。そして自分の写本の扱い方について、重要な語の読みについては自分の判断に委ねることはしなかったことと、破格な語形を写すにあたっては破格形そのままを保って再現すること、「要するに1点の古い写本 (vetustus codex)への全幅の信頼を維持する」のを良しとしたと述べ³⁵、読者には特にそのことを知ってもらいたい、として序文を結んでいる。かれの「信頼」は正当であったといえる。この「古い写本」は13世紀手写の Paris.gr.1385を指すと推定できるが³⁶、のちにこのパリ本は、原本と見なしうる10世紀手写のフィレンツェ本 (Larent.Plut.55.4)に最も近い写本グループに入るものであると解明された³⁷からである。

また、ここでいわれる「破格」(barbarus, barbaries)は、本書の題名 *Glossarium* Τραπεζικὸν μιξοβάρβαρον にみられる μιξοβάρβαρον や序文の中に出る (vocabula) graecobarbara の意味にも通じるもので (献辞の中で「東方帝国で鍛造された語」と表現されていたことは上述した)、ビザンツ期ギリシア語の特質を指している³⁸。東方(ビザンツ)帝国のギリシア語は、音韻・形態・構文上の変化において、ごく大まかにいえば古典ギリシア語と現代ギリシア語との中間に位置し、そこには宮廷を中心とする知識層が重んじた古典ギリシア語(に倣ったギリシア語)、アレクサンドロス大王東征以来のギリシア語圏の拡大の中から出来上がってきた共通語(コイナー)、それぞれの地方語に根ざした俗語が重層的に存在しており、またロマンス諸語のみならず、セム系やスラヴ、トルコな

³² 2点の写本のうちの「王室本」は、註36に記すように Paris.gr.1385 であると同定できる。「メディチ本」は、オノサンドロス校訂で使った gr.2445 ではないか。そこにはレオン帝の断章が数十葉含まれている。

³³ 目録からの推定であるが、Constantini Porphyrogenitii tactica のみを内容とする16世紀手写、132紙葉の小型本 Paris.gr. 2530 (Reg. 3220)がこれにあたるのではないか。Janus Gruter (1560-1627)はハイデルベルクのパラティナ文庫管理の任にあり『ギリシア詞華集』*Anthologia Palatina*の「再発見」(拙稿「解説目録(1)」61, n.1)にも関与した(Pfeiffer 122, 138ほか)。

³⁴ マウリキオス帝の著作は、オノサンドロスのもと同じ2点のメディチ写本の中に(11世紀手写の gr.2442には十数葉、16世紀の gr.2445には1巻から11巻まで)書写されている。

³⁵ “[...] nihil animo meo, quod criticam attinet, indulsisse. imo in barbaris vocabibus exscribendis, barbariem ipsam retineri, representari, ac denique vetusti codicis fidem integram intactamque conseruari placuisse.”

³⁶ Omont, *Inventaire*によれば：Paris.gr.1385. Leonis Sapientis imp. de re militari constitutiones xx；13世紀手写の267紙葉からなる皮紙の小型本で、フォンテーヌブロー城館時代からの王室蔵本である(旧蔵番号 Fonttbl.-Reg.3033)。

³⁷ Dain, 34-35. フィレンツェ写本のほうはレオン6世帝の子コンスタンティノス7世(在位913-959)の主導で作成された(Mazal 178)。

³⁸ “μιξοβάρβαρος: half barbarian half Greek”(LSJ)；*Glossae aliquot ελληνικοβάρβαροι* (Bon. de Smet, 1600), *Glossarium graecobarbarum* (Joh. Meursius, 1614)なども同様の意味をもつと考えられる。

どの言語からの借用もあった。しかも6世紀中頃まではローマ帝国のラテン語が行政の言語として生きていたのであり³⁹、その痕跡は行政・法律・軍事・官僚組織・経済などの分野に数多く残された。このようなビザンツ時代のギリシア語が、古典ギリシア語（およびラテン語）を基盤とする立場からみると、音韻や語形のみならず語彙においても「破格」な、東方的なギリシア語ととらえられているのだ、と理解できる。

『軍事戦術用語集』の本文、異読、索引

序文につづいて項目（見出し語）となる256語（すべてギリシア語）の、頭文字のアルファベット順による目次（Glossarii Synopsis）がある。'Ἀβελσταιριου'が'Ἀδέστρατα'の次に置かれるなど、下位のアルファベット順は必ずしも厳密ではない。本文は212頁。見出し語のすぐあとに、古典ギリシア語・ラテン語・まれにフランス語における同義語・類義語あるいは短いラテン語の説明文を併置し（Suidas [Suda 辞典]からの引用も多い）、出典明記で見出し語やその同義語・類義語の用例文を引くという形式をとっているものが大部分である。用例文は長短あり、1出典で数行の短いものも、複数の著作から例文を引いて複数頁にわたっているものもある。同義語や言い換えの説明文がまったくなくて見出し語と用例文だけの場合もかなり多い。また写本間の異同を付加したり、先行の校訂版やラテン語訳への評価あるいは訂正を付加しているところ⁴⁰も見受けられる。重要な異読が存在すると判断された箇所には、本文中のその語に*の記号を付してあり、異読は巻末の「異読と補遺」（pp.213-218）に記している。

N.R.が本書作成に用いた資料の出典は、巻末に置かれた三つの索引（アルファベット順）のうちの第一と第二に明記されている。第一の索引（pp.219-220 : Index authorum nondum editorum, qui passim in Glossario citantur）は未校訂の写本15点；著作者として紀元前に属するのはフィロン（前3-2世紀）のみで引用回数は少なく、他の出典はアポドロソスの「攻城術」（2世紀）、ユリウス・アフリカヌス（3世紀）⁴¹、プロコピオス（6世紀）、マウリキオス帝の「戦術書12巻」（6世紀）、レオン帝の「勅令20巻」（10世紀）、コンスタンティノス2世帝の「戦術書」（10世紀）などである。Glossarium（語彙集）の写本が4点ありいづれも大蔵書家からの提供で、「非常に古い皮紙の Glossarium graecolatinaum : 但しギリシア語はラテン文字で表記」は Claude Dupuy の、Glossarium Cyrilli と Gloss. Isidori は Paul Petau の、「非常に古いギリシア語語彙集」は François Pithou の蔵書か

³⁹ Mazal 129 sq.によれば、ユスティニアノス1世帝（527-565）の最後期の勅令（Novellae）はギリシア語で出され、7世紀前半の東方帝国では、ラテン語は生きた言語としての地位を失った。

⁴⁰ p.182にJ. Chekeに対する批判の一例がある（本稿p.52）。p.139 Πορακοντάκιονの項ではFilippo Pigafettaのコンスタンティノス帝戦術書の訳を正しいとして評価している。古代の戦術書のラテン語あるいは近代語への翻訳は、15世紀オスマントルコ勢力の脅威にさらされていたイタリア諸都市で始まり、以来盛んに行われていた。

⁴¹ 三帝以外の著作者たちの作品は、上述オノサンドロスやレオン、マウリキオス両帝からの抜書きとともに手写されていることが多く、N.R.の資料としての写本は共通であったと思われる。ただカイサレアの史家プロコピオス（500年頃）の戦記は、目録で見る限り他の著作者とは別の写本伝承だったようである。

ら提供されている⁴²。

第二索引 (pp.220-[223] : Index Aliorum) の「それ以外の著作者からの」資料は、すでに印刷本として公刊されているものを指すと思われるが、70 数点ある。時代的範囲は、ここでも紀元前の著作はまれで、歴史家クセノフォン (前 5-4 世紀) が「キュロスの教育」から古典語の該当語として引かれる⁴³ ほかは、フロンティノス (1 世紀) やアイリアノス (2 世紀)、ウエグティウス (4-5 世紀) らの戦術書、バヴァリア人の法 (Baiuuariorum Leges)、10 世紀のスーダの辞典、A.コムネヌス帝の新勅令 (12 世紀) や歴史家トゥキュディデスへの古註、ゾナラス (12 世紀)、ニケタス・コニアテス (12-13 世紀) 等々で、N.R.の同時代の作品 (*Turcograecia*, Basel 1584)⁴⁴ もあり、それぞれその該当頁を表示。またときにローマの詩人カトゥルス (前 1 世紀)、オウィディウス (前後 1 世紀) など文学作品から例文が引かれることもあるが、著者 N.R.の記憶にある箇所を、ラテン語に同一語がある例として加えるという以上の意図は読みとれなかった。

索引を二つに分けて設けたことは、手写本と印刷本との明確な分別意識がまだ自明のことではなかった 17 世紀初頭では画期的なことであり⁴⁵、かれのこの意識が 20 年後の王室図書館の目録作成事業の基調となったのである。第三の「重要事項索引」については後述する。

以下に、本文 (pp.1-212) からいくつかの例をとりあげ⁴⁶、本稿筆者の理解した範囲でコメントを付ける (続く部分) ことによって本文の内容紹介としたい。

1) p. 4. ΑΒΕΣΤΙΑΡΙΟΥ : Α Βεστιαρίου. φύλακος, qui est principi à veste. “衣服室の番兵の。à veste に由来する [語]”。 ἡ τοῦ ἀβεστιαρίου σκηνὴ なる語句を含む、作者不詳の未校訂写本「野営の配置について」⁴⁷ の一節が引用される。見出し語が主格でなく属格になっていることについては、巻末の「異読および補遺」(p.213) に訂正 : Ἄβεστιαρίου.)ὁ ἀβεστιαρίου, φύλαξ. τοῦ ἀβεστιαρίου, φύλακος. があり、「衣服室の番兵」として主格属格両形が明記されている。著者 N.R.はこの語がどのようにして形成されたか等の注釈は全くしていない。しかし読者は、引用された“A VESTE「衣服 (vestis) に関する召使・番人・係」」なる語句を含むラテン語古碑文や、スーダ辞典、ニケタス・コニアテスやマヌエル・モスコプロスからの説明文を読んで、ἀβεστιαρίων なる語が、ラテン

⁴² “vetustissimum”は 9-10 世紀手写を意味するか (本文中では Glossarium vetus ともいっている)。これら 4 写本の同定は興味深い問題であるが未調査。Considine 253 も原写本の同定にはふみこんでいない。

⁴³ 見出し語 Ἀφέλετρα 「フェルト (馬の防具)」が Xenophon の προμετωπίδιον 「馬の額当」と προστερνίδιον 「胸当」に当たる。など 2 か所で引かれる。

⁴⁴ Martin Crusius (1526-1595, Tübingen) 著トルコ支配下のギリシア見聞録、Sandys II 270, Wilamowitz/Lloyed-Jones 66.

⁴⁵ 上掲註 15.

⁴⁶ 原著ギリシア語の引用にあたって、大文字に付された気息記号およびアクセント記号は、転写の便宜上、当該文字の左肩に移した (原著式の Α', " を 'A, "A としている)。

⁴⁷ Cockle xxxviii の《Anonymous (circa AD 527-565) Byzantine treatise in thirty-three chapters; Chap.xxix :On the construction and guarding of camps》が。

語の a vestiario 「衣服部屋 vestiarium に関する」をギリシア語式に表記してギリシア語の語尾をもつ1語の形に合成した、ラテン語からの借用語であること、βεστίαは本来のギリシア語では ἱμάτια にあたること、βεστιάριον(vestiarium)は「ローマ人の場合、必要な衣類を収納しておく場所」であったことを理解できる。

2) p.11. ΑΛΛΟΓΑ. Ἐλλογα, ζῶα νωτοφόρα, ζῶα ἀχθοφόρα. Ἐλλογα saepe pro equis apud Leonem, Mauricium, & alios [...] “「アロガ」荷物運搬動物、荷駄獣。「アロガ」はしばしば馬の場合に使われ、レオン帝、マウリキオス帝ほかに例あり”。 古典語においてすでに ἄλλογος「言葉/理性のない」の中性複数形 ἄλλογα (ζῶα) が「動物」を指すことがあり、それがのちに「馬」に特定された例⁴⁸。

3) p.28. ΒΑΝΔΟΝ, Βάνδον. “Suidasによれば、ローマ人は戦いにおける印(σημεῖον)を「バンドン」とよんでいる。「古い語彙集」⁴⁹では Bandum, Σίγγον.” これは戦場における「旗印、軍旗」であり、次にあげられるいくつかの例文からは、βανδοφόρος「旗手」、μονόβανδα「(差し迫った戦闘にさいしてのみ掲揚される)皇帝旗」などの派生語も知られる。また、“Item ΒΑΝΔΑ, τάγματα, bandes, troupes.”という、仏語をまじえた説明とその用例も記されていて、「軍団」を指す例があることも分かり、さらにアレクサンドリアのキュリロス(4-5世紀)の語彙集では ΒΑΝΔΟΝが κουστωδία「番兵」の意味でも使われたということも付加されている。なお、LSJ.Suppl.(1996)によれば、Βάνδον「軍旗」はゴート語の bandwa に由来する語で、ユスティニアヌス1世帝治下(527-565)の史家プロコピオスの『ヴァンダル戦記』が典拠として記されている。

4) p.31. ΒΕΡΓΙΑ. Βέργαι ἰτειναί, virgae. “兵士たちが戦闘訓練や血を流さない戦いで使った、柳の鞭、竿(virga)のこと”。 目次には Βεργία. で出ているが巻末の事項索引では Βέργαι ἰτειναί と Virgae ἰτειναί の2カ所から探せる。これもラテン語からの借用語。上述(1) Ἄβεστιαρίουにおいても、同一の項目について事項索引では A vestiario, Vestiarium, Βεστία ἱμάτια の3カ所から探せるようになっていた。ギリシア文字βの音価bは紀元1世紀の初頭頃にvに変わったとされる⁵⁰のものであり、借用語における表記の問題はとくに注意を喚起すべきことと考えられたためであろう。

5) p.83. ΚΕΦΑΛΗ. Κεφαλή, πρώτη καφαλή, chef d'armée, capitaine. *Leo Constitut.* III. § 6. Πρώτη κεφαλή ὁ στρατηγός. Κεφαλή εἶναι, ναυαρχεῖν, ἢ στρατηγεῖν. 「頭、筆頭」として「軍

⁴⁸ 現代ギリシア語では ἄλλογο(v)が「馬」を指す一般的な語で、ἵπποςは方言や「純血種の馬」など限定的に使われる: Chantraine, *DELG* s.v. ἵππος; W.Crighton, *ΜΕΓΑ ΕΛΛΗΝΟ-ΑΙΤΑΙΚΟΝ ΛΕΞΙΚΟΝ*.

⁴⁹ Dupuy 蔵書あるいは Pithou 蔵書から提供された写本のいずれか(上掲註42)。

⁵⁰ Mazal 126: この音価は現代ギリシア語においても保たれている。

隊の長、将軍」とフランス語で言い換えてから、レオン帝勅令の例では「将軍」を「筆頭」といい、また、「^{かしら}頭である」というのは(古典語なら)「海軍または陸軍の将軍(指揮官)である」に当たると説明している。これに続けてニケタス・コニアテス(13世紀)から Κεφαλατίκιον, Κεφαλατικέων, Κεφαλάδας 他いくつかの派生語を引いて、それぞれに、ἡγεμονία, ἄρχων, στρατηγόςと、該当する古典語を記している。古典ギリシア語がビザンツの軍事用語として限定的な意味をもって使われる例の一つ。

6) p.102. ΚΟΡΥΦΑΔΗΝ. Κορυφάδην, apice fastigiato. vel forte, κορυφάδιν pro, κορυφάδιον.

“「先端の尖った冠物で」。あるいはおそらく κορυφάδινはκορυφάδιον. 「^{おもがい} 羈(馬具)」の代わりか”。

古典語の η が発音のうえで ι と混同される現象はすでに前2世紀からみられていた⁵¹。それが綴り字にも現れていること(-διν/-δην)をふまえて、N.R.はさらに写本の中で-ιονと書くべきところを-ινと書写している数語をあげてから、*Mauricius lib. II.Strategic. cap.2* および *Leo Constitut.VI. § 10* にある κορυφάδιν(κορυφάδην), τουφίνの用例文を引用し、そして後者(レオン帝勅令)の箇所のメディチ本の読みは τὸ κορυφάδιον τοῦ ἵππου τουφίονであることを示して、マウリキオス帝の2カ所は(メディチ本に従って)修正すべきであると考えられる、と結論している。この項目などは、序文にあった「マウリキオス帝とレオン帝の用語を比較対照することによって正しい読みをみきわめる」努力の一例である。

7) p.140. ΠΑΡΑΠΟΡΤΙΑ. Παραπόρτια. Gallicè dico : faulses portes : “パラポルティア: フランス語なら faulses portes 「隠し扉」という”。これもフランス語で言い換えている。ラテン語の porta 「門、入口」にギリシア語前置詞(παρὰ 「脇に」)と縮小辞(-ιον, -ια)が合成された語。この項の例文の一つはユリウス・アフリカヌス(*Liber de Bellico Apparatu*, 3世紀)からのもので、軍団の陣営では、公の大きな門四カ所に加えて多数の「脇の小さな出入口」が設置されるべきだとしている。

8) p.147. ΠΟΥΒΛΙΚΙΖΕΙΝ. Πουβλικίζειν, publicâ pugnâ, vniversis copiis conflagere.

δημοσίους πολέμοις συμπλέκεσθαι. δημοσία παρατάξει, ἢ συμβολῆ δημοσία μάχη. δημοσίως. δημοσιεύειν τῷ στρατῷ. πανστρατιᾷ。ラテン語の publico 「公用に供する」の動詞語尾をギリシア語形にした借用語で、N.R.によるこのラテン語の解釈⁵²によれば「全体的な戦闘によって(全軍をもって)戦闘を行うこと」を意味している。古典ギリシア語による言い換えも同義。これに続いてマウリキオス帝の戦術書からの引用があり、この動詞 Πουβλικίζειν が、もとのラテン語により近い「公にする、秘密をもらす」を意味していると思われる一節も説明ぬきで引かれている。巻末の「重要事項索引」では publica pugna からこの項目を探することができる。

⁵¹ Mazal 125.

⁵² Du Cange (1688, col.1211)はこの解釈について “Nescio an bene.” としている。

9) p.182. ΣΤΟΛΑΙ. Στολαί. *Leo Constitut.* VI. § 36. de antiqua velitum armatura: Στολὰς δὲ εἶχον *στερεὰς καὶ πηκτὰς ἀντὶ λωρικίων, καὶ κλιβανίων, καὶ τῶν ἄλλων. Et sanè circa hunc locum indiligens fuit Io. Checus. Nicet. Choniat. clibania vocat, στολὰς ἐπιθωρακίους. “「ストライ」という語は、レオン帝勅令 VI.36.にあり、古代の軽装兵の装備について（用いられている）：「かれらは、甲冑や鎖帷子やその他の装備の代わりに、固くて目の詰んだ服(στολὰς)を着ていた」。またおそらくこの箇所では Io. Checus は不注意であつたらしい。ニケタス・コニアテス [13世紀] は、甲冑の上に着る στολὰςを clibania [κλιβάνια]といている。” 序文で述べたように、本文は「信頼する古写本」の読みに従うが、異読のある語（στερεὰς「固い」）については*印を付し、巻末 p.217の異読一覧に“c[odex]. M[edicus]. ἰσχυρὰς.”としてメディチ本の異読 [類義語] も示す、という例である。また、ここで Io. Checus と名指されているのは、ケンブリッジの Sir John Cheke であろう。Cheke はイギリスで戦術書の写本を扱った最初の人で、レオン帝の *Constitutiones Tacticae* の最初のラテン語訳を出している（1554 および 1594 年 Basel）⁵³。N.R. のコメントはそれについてであろう。かれは別の項目（p.103）Κόχλακες「小石（手軽で無尽蔵な武器として）」においても、レオン帝の「海戦術」§ 13 の一節を原文で引いてその末尾に「Io. Checus はこの箇所を正しく理解していない」と記している。

10) p.206. ΦΡΑΤΡΙΑ. Φρατρία, πληθύς. “「フラトリア：集団」”。ビザンツの用語としての「フラトリア」は、古典語で言い換えれば「人の集まり、集団」に当たるとして、いくつかの例文を示す。ヘレニズム時代の詩人カリマコス作のアテナ女神への讃歌の古註から Νυμφῶν φρατρία καὶ ἄθροισις という例もあげられていて、本書では数少ない文学作品関係の例示である。またこの語は「古い語彙集 (Vetus Glossarium)」⁵⁴ によるとラテン語の contubernium 「戦友であること」、factio 「一団、党派」、coniuratio 「共謀者」の意味をもつ、という指摘も付加されている。φρατρίαの派生元である φράτηρ 「兄弟」は、(印欧基語のレヴェルでの議論はあるが)ギリシア語では「血縁の兄弟」を意味するものではなく⁵⁵ なんらかの相互扶助や連帯によって結ばれた人間関係を指す語であった。それはN.R.のこの項目からもうかがえるところである。

第三の索引 ([pp.224-229]: Index Rerum Notabilium)「注目に値する重要事項索引」には、本書巻頭の「目次」に挙げられたギリシア語の項目数 256 より 50 語ほど少ない数の語や句が記載されている。その大半はラテン語で、ラテンの用語をギリシア文字表記にした借用語が多く、また僅か

⁵³ Cockle, xvii. J.Cheke(1514-1557)は、イギリスの古典学の発展に大きな貢献をした人物で、古典ギリシア語の発音を「エラスムス式」に改革する運動を推進し、また『弁論術』の著者 Thomas Wilson と共に前 4 世紀アテネの大弁論家デモステネスの最初の英語訳を出した(拙稿「解説目録(2)」77, 81)。

⁵⁴ Dupuy 蔵書あるいは Pithou 蔵書から提供された写本のいずれか(上掲註 42)であろう。

⁵⁵ 血縁なら ἀδελφός, κασίγνητος がある。なお Chantraine, *DELG* s.v. φράτηρ 参照。

ではあるがフランス語やラテン語を単独あるいは併記で示しているところ (Coruée 「雑役」 ; Liurées 「制服」 ; Μασζούκια, Masse 「^{つち}鎚矛」 ; Ἄλογον, equus 「馬」 など) もあり、身近な語から入って「皇帝たちのギリシア語」に近づくための一手段としてこの索引が考えられていると推測される。さらに、この第三の索引が語の検索のためのみならず、献辞にも謳われたように著作を通してビザンツ帝国を知る (もちろん軍事戦術関係という範囲内ではあるが) ための役割も担っていることは、次のような二三の例からも明らかであろう。

「重要事項索引」の《Aquam in aridis regionibus quomodo adseruabant. 44》「乾燥地域における、かれらの水の保存法」は、本文では p.43 に始まる見出し語 Βούτιον⁵⁶ 「円錐形容器」の項に当たり、そこには cupella, Botta (Italis), Γαυλός 「水汲み用バケツ」などの言い換えのあと、マウリキオス帝「戦術書」第 10 巻からの長い引用がある。引用文 (p.44) では「水を得難い場所では陶製の大きな甕^{かめ}または頑丈な円錐形容器 (βούτας τελείας 複数) を用意してそこに水を満たし、水中に川床の小石を入れて、冬まで、そして雨水を貯めるための水槽が作られるまで保つようにすべきである」ことや、さらに、貯蔵された水が容器の中で淀んで悪臭を生じることがないように水を少しづつ動かすための工作なども記述されている。

また、索引の《Deus nobiscum, vociferatio militaris. 126》「神はわれらと共に。軍隊の喚声」は本文 p.126 にあたり、見出し語は Νοβίσκουμ 「われらと共に」で、索引のラテン語句が繰り返されたあとにマウリキオス帝第 3 巻からとして長い引用があり、「戦場で敵と対峙したときにこの喚声を挙げるのが慣習になっていたが、これは適切でないと思われる。この喚声によって、臆病な兵士たちは恐怖心がつって尻込みしてしまうし、大胆な連中は興奮ではやりたって列から飛び出すので隊列が崩れてしまうから。したがって、神への祈りは戦闘の行われる日、出陣前に陣営の中で整然と捧げるべきである」という趣旨のことが述べられている。

この他にも、《Aquam milites secum ferebant in flasciis》「(酒でなく) 水を瓶に満たして (鞍袋に入れて) 携行」(本文見出し語: Ἀργαβία) 《Arma sua miles negligere non debet》「武器放置の禁止」(Ῥεπαρατίων) 《Milites ne audeant vagari》「徘徊禁止」(Βαγεύσαι)、《Missae in exercitu manè et vesperi》「軍隊における朝夕のミサ聖祭」(Μίσσαι) などさまざまな事項が挙げられている。読者には、この「事項索引」から入って最高指揮官たちによる活気あふれる記述を読み、ビザンツ軍隊の慣習や諸規則とその実施状況をうかがい知ることが可能なのである。

本書巻末の 5 頁に収められた「異読と補遺」については、上記の本文例のなかでも例示したが、本文中に * 印を付けた読みに関して、とくに著者自身はその序文で意図していたように、主たる 2 写本の異同を記しているところが多い。p.213 μακρῶν.) c[odex]. Regius, μικρῶν; p.215

⁵⁶ LSJ: βούτις βούτις, βούτη, βούτιον および [βο]ῦτις (Suppl).

ἐπιτήδεια.) c. Med [iceus]. ἐπιτήδειωνのような形式である。ときには項目 Κούρηση (p.215) に例文をさらに付加えて、「これは Fed. Morellus⁵⁷ が Joh. Chrysostomus の説教集の古い皮紙写本から写して私に知らせてくれたものである」と記しているところもある。最終頁 (p.218) に、「パリにて著す、1599 年、法廷の休廷期間に (Rebus prolatis)」という奥書があり、この奥書 (p.218) のあとに「正誤表」がごく小さい活字で 7 行置かれ、その最後は「他の誤りは、寛大なる読者よ、君自身でたやすく訂正できるであろう」と結ばれている。

リゴー編著のビザンツ軍事用語集は、200 頁ほどの小さな贅沢な本である。20 歳代前半の著者が、ファイドロスやオノサンドロス校訂の経験を生かし、未校訂写本数点をふくむ新旧の資料調査や書きためたノート「語彙集」という形でまとめたと推測されるもので、収録語数も多いとはいえない。9 年後に出た Joannes Meursius (1579-1639) の *Glossarium graeco-barbarum* (Leiden 1610) は、頁数 800 を超え、約 3600 項目、用いた写本は 84 点、印刷本のリストは 18 頁にわたる⁵⁸ という。古典期より後のラテン語を対象とする語彙集としては、この時代には、Fr.Pithou と Fr. Lindenbrog の共著になる *Liber legis salicae* (1602)⁵⁹、J. M.Lydius, *Glossarium latinobarbarum* (Leiden 1613)、G.J. Vossius, *De vitiis sermonis et glossematis latino-barbaris* なども作成されている⁶⁰。一方で戦術書としては、レオン 6 世帝のラテン語訳はすでに J. Cheke によって出されており、また王室図書館において N.R. の前任者となるカソーボンが、1589 年にリヨンでポリュアイノス (2 世紀)⁶¹ の逸話集的な *Στρατηγηματα* ギリシア語原文をラテン語訳とともに公刊している。こうした状況のなかで生まれた本書は、「皇帝たちの軍事用語」に焦点を絞って、諸写本の校合を基に古典語との距離を見定めつつビザンツ時代のギリシア語の意味を探るための「辞典」であり、それと同時に、採録された多くの引用例文を読むことによってビザンツ時代の軍事のあり方を知る「事典」でもあった。そこに読者は、ビザンツ学の黎明期にある年若い法服ユマニストの、知的好奇心に満ちた視線を感じる。印刷本として魅力ある本書⁶² は、内容の面でも、前世紀の G. ビュデの *Commentarii Linguae Graecae* (Paris 1529)⁶³ を基礎としてキリスト教著作家までを視野に入れた H. エスティエンヌの *Thesaurus Graecae Linguae* ([Genève] 1572) と、その百年後の Ch. デュ・カンジュ (Du Cange) の *Glossarium ad Scriptores Mediae et Infimae Latinitatis* (Paris 1678) および *Graecitatis* (Lyon 1688)⁶⁴ という巨峰を擁する山脈の一角に、小さくはあるが評価に値する位置を占める書物であるといえよう。(AM2H)

⁵⁷ オノサンドロス校訂の最終段階で写本の数葉を提供した人物、本稿 3-1) および註 24。

⁵⁸ *Considine* 254 sq. : 第 2 版 (1614 年) では項目数は約 5400 になった。この語彙集の様相は N.R. の本書に負うところが大きく、とくに索引は、N.R. の方針を借りた形で作られているという。

⁵⁹ 上述註 29。

⁶⁰ *Considine* 261 sqq.

⁶¹ Polyaeus は N.R. の出典リストに入っていない。

⁶² 上掲註 3。

⁶³ 拙稿「解説目録 (1)」64-67。

⁶⁴ Praefatio XX の中で Du Cange は軍事戦術用語の分野における N.R. の書の先駆的な役割に言及している (p.xiv)。

12. アンヌ・ルフェーヴル監修 『カリマコス作品集』

標題と刊記：

KΑΛΛΙΜΑΧΟΥ| KYPHNAIOY| YMNOI, EΠΙΓΡΑΜΜΑΤΑ| KAI ΑΛΛΑ ATTA.
|CALLIMACHI| CYRENÆI| HYMNI,| EPIGRAMMATA ET FRAGMENTA:|
EJUSDEM POËMATIUM| DE COMA BERENICES| A CATULLO VERSUM. |
ACCESSERE ALIA EJUSDEM EPIGRAMMATA QUÆDAM| nondum in lucem edita; &
Fragmenta aliquot in aliis| editionibus prætermisssa. | *Adjecta sunt ad Hymnos vetera Scholia Græca.* |
ADJECTUS ET AD CALCEM INDEX VOCABULORUM OMNIUM. | *Cum Notis ANNAE*
TANAQUILLI FABRI FILIAE. | PARISIIS, | Excudebat SEBASTIANUS MABRE-CRAMOISY, Regis
Typo-|graphus, viâ Jacobæâ, sub Ciconiis. | M.DC.LXXV. | CUM PRIVILEGIO REGIS
CHRISTIANISSIMI.

カリマコス 『作品集』

(監修者) アンヌ・ルフェーヴル.

(出版者) セバスチャン・マーブル=クラモワジー.

(出版地) パリ.

(出版年) 1675年.

(体裁) In-4 ° a⁴ e⁴ i² A-Kk⁴ Ll-Aaa². f.Y2('X2') [18]+262+[58]pp.

221 × 167 mm. テキスト面：160 (152) × 107 (97) mm.

(捕語) 各折丁末尾に捕語あり.

(装訂) 白革板表紙.

(来歴) 表紙裏に Ex-libris: «ARMA JOHANNIS BARONIS CARTERET DE HAWNES
MDCCCXVI» の銘の入った紋章貼付* .

(成蹊大学図書館) 請求記号：884.8/1 資料ID: 0080201032

(内容概略)

ff.a2r - a3v : P. D. Huet 宛献辞 (パリ、1674年7月29日付) .

ff.a4r - e1v : 読者宛序文.

ff.e2r - i2v : カリマコス古伝、Lilius Gregorius Gyraldus ([Giglio Gregorio Giraldi] 1479 - 1552),
Historia poetarum tam Graecorum quam Latinorum Dialogi XX (1545)、古代の所伝などか
ら .

* 円形の紋章部分のみを切抜いて貼付したもの . J.Carteret は 18 世紀前半英国の文人政治家・外交官として国家の要職にあつた Granville 伯爵 John Carteret (1690-1763) の家系に属する人物と推測される .

- p.[1] : 「キュレーネーの人カリマコス作、讃歌」 讃歌 6 篇の目次 .
- pp.2 - 113 : 本文 . 各頁下部分に古註つき . ギリシャ語原文とラテン語訳との対訳は見開きで同一紙葉の表裏が同一言語になるように印刷してある :
- p.2 - : 「ゼウス神讃歌」
- p.14 - : 「アポローン神讃歌」
- p.26 - : 「アルテミス女神讃歌」
- p.54 - : 「女神デーロス(島)讃歌」
- p.86 - : 「パラス(アテーナー女神)の湯浴み」
- p.100 - : 「デーメーテル女神讃歌」
- p.114 - : カリマコス作「ベレニーケーの髪」のカトゥルスによるラテン語訳 *Coma Berenices* .
- p.[119] - : カリマコス作「エピグラム」ギリシャ語本文およびラテン語対訳(古註なし) 32 点 .
- p.138 - : カリマコス作とされている「エピグラム」9 点(ギリシャ語本文とラテン語訳)および P. D. Huet から提供された写本からの「エピグラム」19 点(本文のみ) .
- p.149 - : ヴルカニウス版に収められたカリマコス断片 86 (=29+57) 点 .
- p.161 - : 本書で新たに追加されたカリマコス断片 53 点 .
- p.169 - : 本書校訂者アンヌ・ルフェーヴルによる「讃歌」・「エピグラム」・「断片」へのラテン語注解 .
- f.Kk4r[=p.263] - : 全原文のギリシャ語「語彙集」 .
- f.Aaa2r : 古註古伝補遺(アンティゴノス『伝奇集』およびソーリーヌス『博学の書』第 30 章からの抜粋を含む) .
- f.Aaa2v : 正誤表、勅許状(1674 年 10 月 26 日付) パリ出版組合登記証(同 10 月 30 日付) .

解説

アンヌ・ルフェーヴル (Anne Lefèvre 1654-1720) の校訂したカリマコス『作品集』である . アンヌは父タヌギー・ルフェーヴル (Tanneguy Lefèvre 1615-1672) が弟に施すギリシャ・ローマ古典教育を傍聴していて才能を認められ、当時としては稀なことだが、弟と同等に父から英才教育をさずけられた . 父の死後パリに出たアンヌが初めて学界に問うたのがこの校訂版である . 後に 1683 年に、かつて父に師事したことのあるアンドレ・ダシエ (André Dacier 1651-1722) と結婚し、ダシエ夫人として令名を馳せることになるが、このカリマコス『作品集』で若くして一躍頭角を現したアンヌ・ルフェーヴルは、続けて「王太子版」(in usum Delphini) と呼ばれるラテン文学の校訂版の監修を次々と手懸けることになる .

ヘレニズム時代アレクサンドリアの詩人カリマコスが遺した多数の作品は、『ホメーロス讃歌』を初めとしてあらゆる「讃歌」を網羅したビザンツ時代の『讃歌大全集』に収録された 6 篇の「讃歌」と、やはりビザンツ時代のエピグラム集成『アントロギア(詞華集)』(Anthologia) に収めら

れた「エピグラム」を除いては、ことごとく散佚した。

近代になって初めてカリマコスの断片に注目したのは、アンジェロ・ポリツィアーノ（Angelo Poliziano 1454 - 1494）である。彼は「讃歌」第5歌の校訂版と翻訳を公刊しただけでなく、「ベレニーケーの髪」がカトゥルスのラテン語訳（『歌章』66歌）で残っていることも認識し、小叙事詩「ヘカレー」のいくつかの断片も特定していた。

これに続けてカリマコスの断片を初めて本格的に収集したのが、ボナヴェントゥラ・ヴルカニウス（Bonaventura Vulcanius [De Smet] 1538 - 1614）によるカリマコス『作品集』（1584年）である。ここには各種『古註』（scholia）から発見した断片57点とともに、『語源辞書』（Etymologicum）に由来する断片29点の計86断片が収められていた。

本書はこれを承けて、『古註』などからの断片を新たに53点追加して計139点とするとともに、「断片」に先だって「讃歌」6篇の校訂本文（欄外にギリシャ語「古註」を含む）とラテン語訳、カトゥルス訳による「ベレニーケーの髪」ラテン語本文、従来知られていた「エピグラム」32点の本文とラテン語訳、カリマコスに擬されている「エピグラム」9点の本文とラテン語訳、同じく「エピグラム」の本文のみ19点を配し、「断片」に続けては、「讃歌」・「エピグラム」・「断片」への「注解」（標題に謳われた「古註」ではない）と、全原文のギリシャ語「語彙集」を巻末に配している。本書の「序論」はヨハン・ゲオルク・グラエヴィウス（Johann Georg Graevius [Greffé] 1632 - 1703）によるカリマコス『作品集』（1697年）にもそのまま再録され、カリマコス研究の基盤をなすものと評価されていた。

カリマコスの断片集成として本書を凌駕するものとしては、同じグラエヴィウス編カリマコス『作品集』（1697年）にリチャード・ベントリー（Richard Bentley 1662 - 1742）が寄稿した「付録」を待たなければならない。ベントリーによって漸く断片の数も417点へと飛躍的に増大しただけでなく、それまでの出典別による配列から、原作品の構成を推定し、それに基づいた論理的配列を行うようにと変わったのである。

ベントリーの業績は、オットー・シュナイダー（Otto Schneider 1815-1880）の『カリマコス作品集』（1870-73年）に忠実に引用され、19世紀末以来発掘されてきたパピルス断章を集大成したルドルフ・プファイファー（Rudolf Pfeiffer 1889-1979）の『カリマコス作品集』（1949-53年）の公開によって初めて凌駕されることになる。

このような流れの中に置いてみれば、本書は、校訂者本人にとっても、カリマコス作品の研究史においても、画期的な出版物と見なすことができる。これも好評を博した後年の『イーリアス』のフランス語訳（1699年）と僅かのギリシャ語散文を別にすれば、フランス古典主義の最中にあって、アンヌ・ルフェーヴルも専らラテン文学に傾注していたはずである。名のみ高く忘れられたギリシャ詩人カリマコスが何故デビュー作の題材として選ばれたのか、正確なところは不明である。しかし、既に王太子の教育係となっていた父の旧友ユエ（Pierre Daniel Huet 1630-1721）に宛てた「献辞」からは、標題に謳われてこそいないものの、本書は王太子の教材（上述「王太子版」）とし

での使途が想定されていたことが判る。また、「序論」の冒頭には、かつて父タヌギーが『パエドルス寓話詩集』校訂版（1657年）で成した約束を果たすためという本書刊行の意図が明記されている。9点のカリマコスの「エビグラム」も同じくユエの提供した写本から採られたものと記載されており、本書は高名な古典学者だった父タヌギーの遺した多様な意味での資源を活用した作品とみてよいだらう。余りに好評を博したため、稀覯書としての価値が減じているのが、本書の唯一の難点と言える。（HK）

参照文献（追補）

Baillet, Adrien ; *Des enfans devenus célèbres par leurs études ou par leurs écrits. Traité historique*, Paris 1688.

Cockle, Maurice J.D. ; *A Bibliography of English Military Books, Upto 1642 and of Contemporary Foreign Works*, London 1900 (repr. TN-USA 2010).

Considine, John ; *Dictionaries in Early Modern Europe. Lexicography and the Making of Heritage*, Cambridge 2008.

Dain, Alphonse; ‘Inventaire raisonné des cent manuscrits des “Constitutions tactiques” de Léon VI le Sage’ in *Scriptorium* I-1 (1946), 33-49.

Delisle, Léopold ; *Le cabinet des manuscrits de la Bibliothèque Impériale I*, Paris 1868 (repr. G.Olms Hildesheim -N.Y. 1978).

Dennis, George T.; *Maurice’s Strategikon. Handbook of Byzantine Military Strategy*, Philadelphia 1984.

De Sallengre, H. ; *Histoire de Pierre de Montmaur, professeur royal en langue grecque dans l’Université de Paris*, La Haye 1715 [Online - Princeton University].

De Smet, Ingrid.; ‘Rigault (Nicolas) (1577-1654)’, in *Centuriae Latinae II. Cent une figures humanistes de la Renaissance aux Lumières, A la mémoire de Marie-Madeleine de la Garanderie*, Réunis par Colette Nativel, Genève 2006, 727-733.

De Thou, Jacques-Auguste ; *Histoire universelle de Jacques-Auguste de Thou, depuis 1543 jusqu’en 1607, traduite sur l’édition latine de Londres*, (Tome XV. 1607-1610 : Suite de l’Histoire de Jacques Auguste de Thou par Nicolas Rigault) Londres [Paris] 1734.

Devreesse, Robert ; *Introduction à l’étude des manuscrits grecs*, Paris 1954.

Du Cange, Charles; *Glossarium ad Scriptores Mediae & Infimae Graecitatis*, Lyon 1688.

Freytag, Frieder. Gotthilf ; *Analeca Litteraria de Libris Rarioribus*, Leipzig 1750.

Heuser, Beatrice; *The Evolution of Strategy - Thinking War from Antiquity to the Present*, Cambridge 2010 [Online - Excerpt, C.U.P.]

Hoffer, J.C.F. ; *Nouvelle Biographie Générale depuis les temps les plus reculés jusqu’à nos jours* t. 42, Paris

1863 [NBG].

Kazhdan, Alexander, P. et alii ; *Oxford Dictionary of Byzantium*, Oxford 1991.

Krumbacher, Karl ; *Geschichte der Byzantinischen Litteratur von Justinian bis zum Ende des Oströmischen Reiches (527-1453)* I & II, 1897 (repr. Burt Franklin N.Y. 1970).

Liddell-Scott-Jones ; *Greek-English Lexicon with a revised Supplement*, Oxford 1996.

Martin, Henri-Jean ; *Livre, pouvoirs et société à Paris au XVIIe siècle (1598-1701)* t.1, Genève 3^e éd.1999.

Mazal, Otto ; *Manuel d'études byzantines*, Graz1988, trad. fr. par Cl. Detienne, Paris 1995.

McCotter, Stephen ; 'The Nation which Forgets its Defenders will Itself be Forgotten : Emperor Maurice and the Persians', 2003 : <http://www.deremilitari.org/resources/articles/mccotter2.htm>

McKitterick, David ; *Print, Manuscript and the Search for Order, 1450-1830*, Cambridge 2003.

Nicéron, Jean-Pierre ; *Mémoires pour servir à l'histoire des hommes illustres dans la république des lettres. Avec un catalogue raisonné de leurs ouvrages.* Tome XXI, Paris 1733 [Online - Oxford University].

Omont, Henri ; *Inventaire sommaire des manuscrits grecs de la Bibliothèque Nationale*, 4 vols., Paris 1886-1898.

Perrault, Charles ; *Les hommes illustres qui ont paru en France pendant le XVIIe siècle*, Tome II, Paris 1701 [Online - Bibliothèque jésuite des Fontaines].

Société de gens de lettres et de savants ; *Biographie universelle, ancienne et moderne* t.38, Paris 1824 [BU].

Sophocles, E.A. ; *Greek Lexicon of the Roman and Byzantine Periods (From B.C.146 to A.D.1100)*, 2 vols., New York s.d. [3rd ed. 1887].

Fr. オリヴィエ = マルタン / 埴 浩訳 『フランス法制史概説』創文社、昭和61年（原著初刷1984年）。

ポリュアイノス / 戸部順一訳 『戦術書』（叢書アレクサンドリア図書館 第六巻）国文社、1999年。

細井敦子・平田眞・成蹊大学図書館；「成蹊大学図書館蔵貴重書 解説目録(1)西洋古典の初期刊本」 in 『成蹊大学文学部紀要』41号（2006年）49-80。

同上；「(2)Thorne 文庫の16世紀刊本から」 in 42号（2007年）67-84。

同上；「(1 & 2)補遺」 in 43号（2008年）25-32。